

うしお

第 69 号

昭和 37 年 2 月

目 次

九州南部近海における カタクチの漁場につ いて	漁業部 川上市正	1
36年 / 2月のマグロ 延縄漁況	漁業部	8
一般漁況 (1月分)	漁業部	12
普及員だより	東町駐在 中間健一郎	13
目に角たてる「タコ」(水中漫歩)		23
奄美短信	大島分場	26
各部の動き	編集部	27
養魚場の動き	大口養魚場	30

鹿児島市塩屋町十八番地の七

鹿児島県水産試験場

九州南部近海におけるカタクチの漁場について

漁業部 川上市正

は し が き

カタクチの漁場は九州沿岸各地で形成され、その漁獲も漸増の傾向にあるようである。

近年沖合においてカタクチの漁場が形成され巾着網によつて漁獲されている。

この漁場が何時、何処でどのような海況条件の所で形成されるかを知り、このような条件の所が鹿兒島沖合に存するかどうか。新らしい漁場開発のための参考資料として一応調査を進めた。

調 査 の 方 法

カタクチの混獲された漁場、時期については熊本、長崎各県水試の漁況報告から、又、こしき島近海の漁況については北薩水指の観測値を用いた。

漁 場 に つ い て

第1図のようにカタクチ漁場形成の場所は五島、野母崎半島、天草、こしき島に囲まれた海域で、主として200m線から500m線にかけて漁獲されている。

時期は主として秋から冬にかけてであるが、一部では7、8、9月の夏季にみられる。

漁獲量としては、何れも他魚種と混獲される程度でその占める割合は少なく、量的にはわづかなものである。

たゞ33年12月から34年1月にかけてこしき島近辺でカタクチ大型の単一群が多量に漁獲されたこともあり、薩摩半島近辺におけるカタクチ群の来遊も有望視されてきている。

海 況 に つ い て

カタクチ漁場の形成される。五島、天草沖合の海況は大

陸斜面に沿つて北東進する対馬暖流は、男女群島附近で一部分岐して右旋し、男女群島を中心にして右旋環流域が存在し、一方九州西岸沿いに南西流する対馬反流は五島列島西岸から男女群島東方を通り、こしき島沿いに野間岬沖合附近にのびこしき島附近では南部から北東進した暖流の地形的な湧昇による小範囲の左旋渦動域と天草西岸から南流して張出した沿岸水の錯綜する水域で二方からの異水系の流入によつて汐境も顕著である。従つてこの附近における漁場形成は外洋性中間水帯の中にあるといえる。(対馬暖流開発調査報告書第1輯 熊本県の海況と漁況、長崎県の海況と漁況)

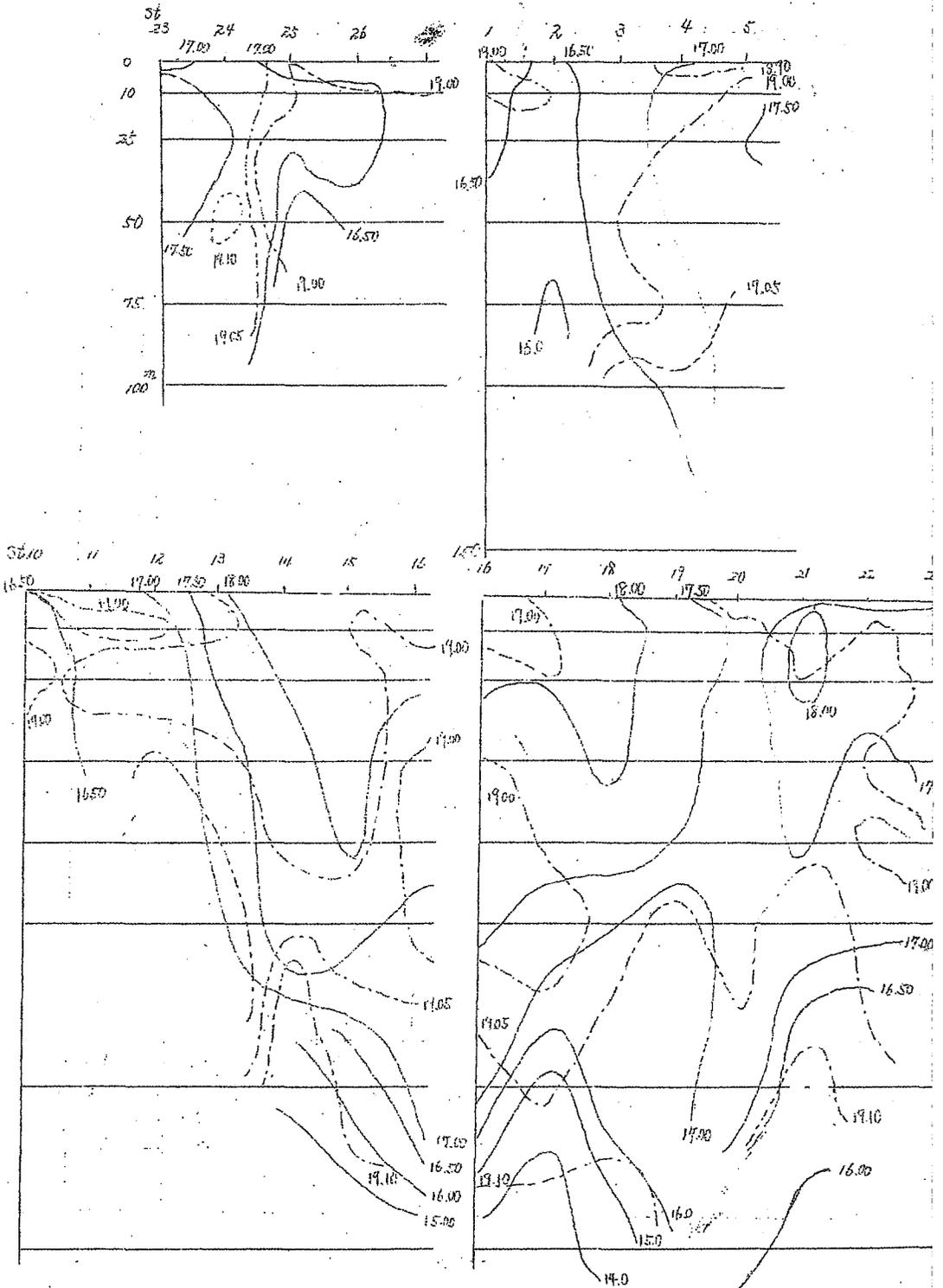
鹿児島県沖合に形成されたカタクチ沖合漁場の海況を把握するために北陸水指実施の昭和30年1月の海洋定点観測資料に基づいてこしき島近海の海況を水温、塩素量垂直分布図並びにT-Sダイヤグラムによる平行四辺形点数表示法(長崎海洋時報第2巻2の3号掲載)によつて解析を試みた。

第2図の水温、塩素量垂直分布図をみると、St.15の表層に暖流反流と思える比較的高温高かんな水塊がみられ、又水深100m以深ではSt.14を中心に19.10%で示される湧昇によると思われる高かん部が存在す。

St.16~18、St.21の200m以深にも19.10%の高かん部があつてこれも地形的な湧昇によるものと考えられる。こゝでT-s1ダイヤグラム平行四辺形点数表示法によつて求めた数値の平面的な分布図(第3.4図)をみれば+2.0以上 0~+2.0 0以下の3つに大別される。

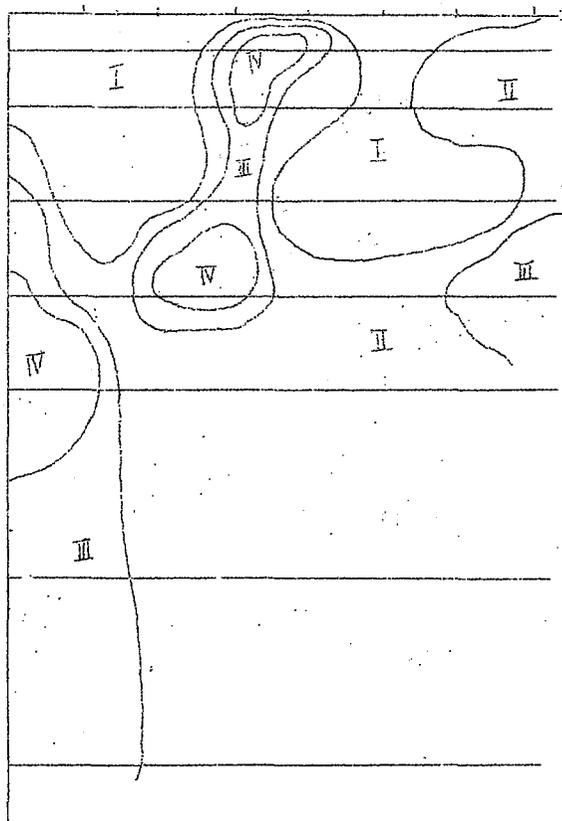
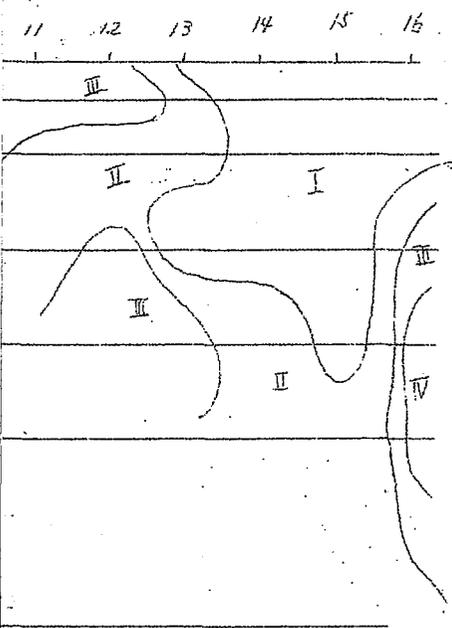
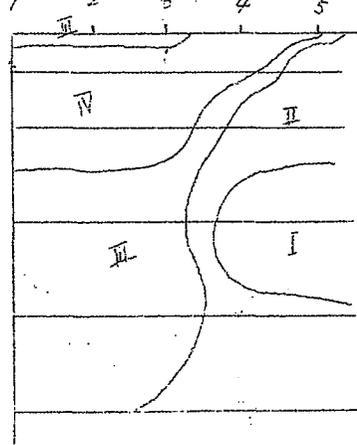
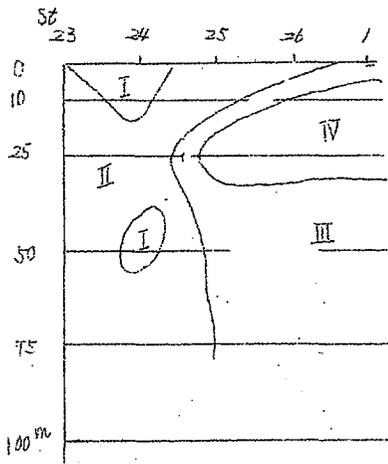
0以下で示される海域は、九州沿岸水並びに沿岸混合系水とみられ、+2.0以上の海域は対馬暖流系水でこれの中間にある0~+2.0で示される海域は外洋性中間水とみなされる。

30年1月 水温、塩素量垂直分布図 第2図



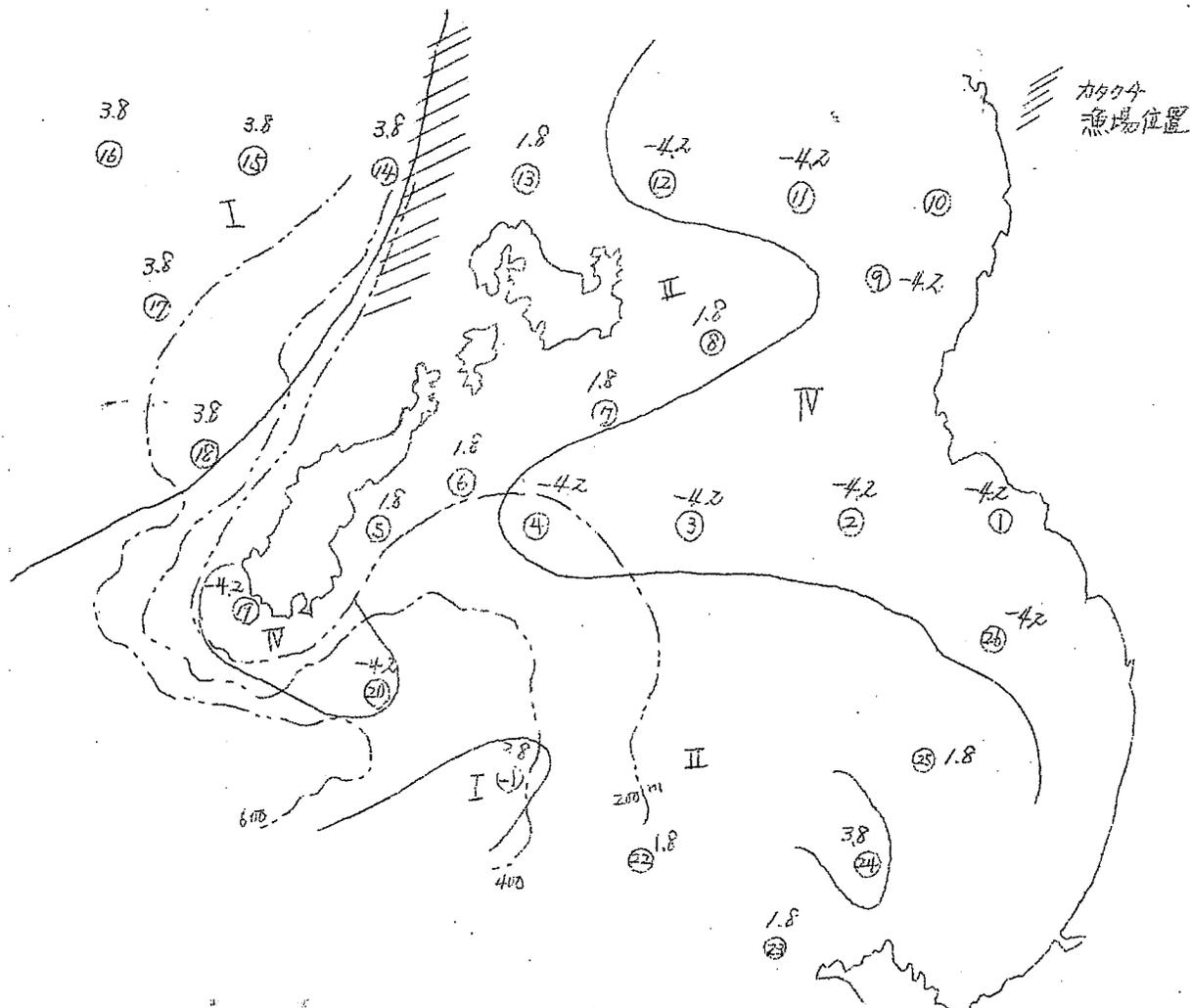
平行四辺形点教表示法による数値の垂直分布図

- I +3 以上
- II 0 ~ +3
- III -3 ~ 0
- IV -3 以下

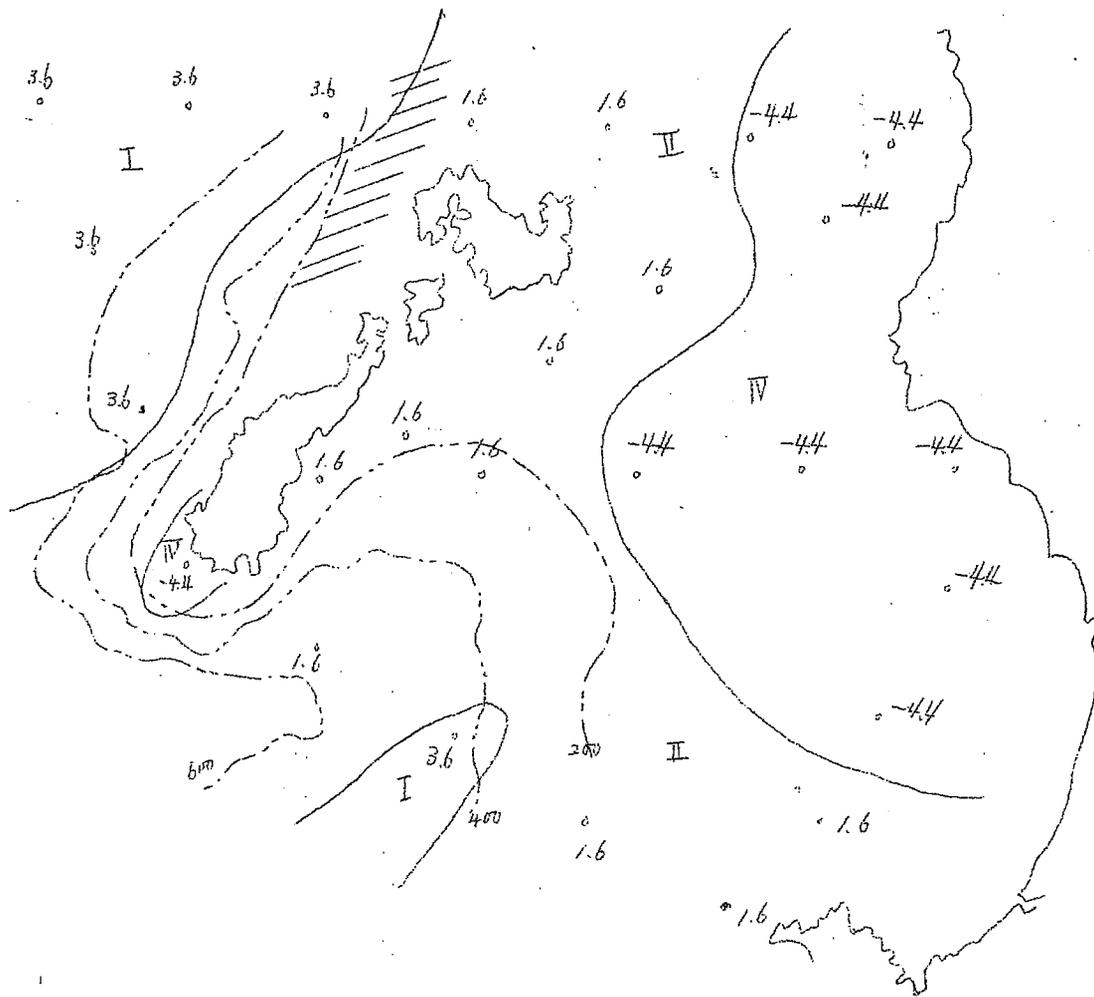


甌島近海の水素とカツナ漁場 10m層

①印は定集番号



瀬戸内海の水深とカタコト 25m層



36年12月のマグロ延縄漁況

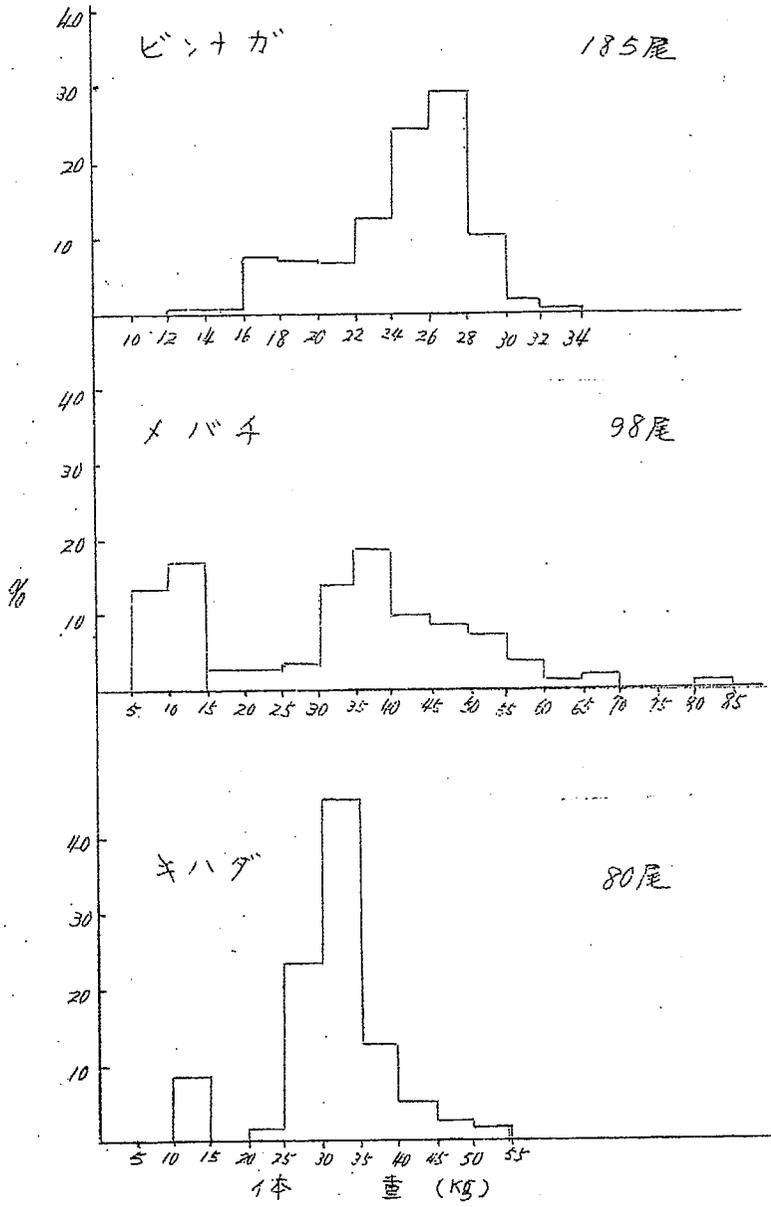
漁業部

11月に引続き各船ビンナガを目的として 20°N 以北、 $124^{\circ}\sim 137^{\circ}\text{E}$ 附近で操業している。組成をみると、ビンナガの36%が最高でメバチの14.5%キハダの13.0%がこれに次いでいる。釣獲率を見るとビンナガ平均0.77(最高2.35、最低0.04)、メバチ平均0.30(最高0.52、最低0.04)となつている。

例年ビンナガは初期 20°N 附近から獲れ始め、漸次北上し3月頃には $27^{\circ}\sim 33^{\circ}\text{N}$ 、 $130^{\circ}\sim 140^{\circ}\text{E}$ 附近へと移動し活潑となるのであるが、12月は未だ北部海域の釣獲率は1.0内外で(20°N 附近では1.0~4.0程度)余り活潑でない。

魚体は1.2Kg~3.4Kgのものが水揚げされているが、主群は2.5~2.7Kg(7貫内外)のもので50%を占めている。これは5才以上の高年魚であり、35年盛漁期(3月)の主群であつた1.0~1.5Kg(2.5~4貫)の4才魚は未だ全体の1%に過ぎず漁期は初期といえよう。それも時日の経過と共に4才魚の混入が多くなり、漁況は活潑となるものと思われる。

メバチ、キハダも先月と大差ない漁況である。



魚種別体重組成
(36年12月)

一般漁況（1月分）

漁業部

※東海サバ

12月の好漁に比べ、1月の漁況は著しく不振となつている。漁場は前半は12月同様 $28^{\circ}-0.8'N$ 、 $123^{\circ}-2.7'E$ 中心の534区に形成されたが、漁況不振と共に各船広く操業し一時 $28^{\circ}-1.0'N$ 、 $123^{\circ}-3.0\sim 4.7'E$ とEへ移動したが、その後 $2.7^{\circ}-1.0\sim 5.0'N$ 、 $122^{\circ}-3.0\sim 5.0'E$ の546、547区へ南下したり魚釣島周辺へも漁場が形成されたが、各漁場とも全く不振である。魚群は反応もウスイがそれ以上に浮上の悪さが漁況不振の一因でもある。水温は12月からして低下し、 $17\sim 18^{\circ}C$ 台を示し魚体も小型魚が多くなつている。

※カツオ一本釣

枕崎、山川入港船のカツオ一本釣船は台湾東方及びグアム島近海にて操業し20,000Kg \sim 40,000Kg程度の水揚をなしている。

※巾着網漁況

片手巾着網は屋久島近海を操業し、ムロアジ、サバ混りで1統300 \sim 2,000杯位の漁獲であり、双手巾着は市来沖こしき島、野間岬沖合で操業しウルメ、アジ類を対象に操業している。

※曳縄漁況

山川根拠船は開闢沖合でヨコワを対象として操業をなし、枕崎港船は枕崎沖合から野間岬にかけて1日1隻15 \sim 20尾位の漁獲があり、1尾1.8 \sim 3.7Kg程度の魚体である。

※薩南海域瀬魚漁況

大型船は久米島、西表島周辺で操業し、1航海約4,000Kg位の水揚、小型船は宝島近海を操業し、成績は良好。

のり人工培養と人工採苗

(技術交流報告書)

東町 駐在普及員 中間 健一郎

昨年も標題について、熊本県宇土市及び熊本水試海路口(うじぐち)分場で技術習得を行ない、平面培養と野外採苗技術の習得普及がなされたのであるが、まだ幾多の問題点が残されており、その普及に伸びなやみがあるように思う。

沿岸漁船漁業の不振(経済成長率の低さ)によりノリ養殖が各地で注目されているが、南限とされている鹿児島県においては高温、高塩、低栄養分等種々の困難点があり、企業化している地域は少なく、昨年度からヒトエグサ養殖が注目をあび、東町を中心としてその普及が考えられているが、先進地ノリ養殖地帯でアオ駆除にやつきになっている今日、これを裏面から観察することも本県にとつては有意義なことであり、なお現在アマノリ養殖地帯(出水、喜入等)では正面からこれを導入することは本県ノリ養殖業に一服の成長剤を盛ることにもなると考えるが、熊本を中心とする平面培養、野外採苗に比べ、相当の成果をあげている岡山県の室内採苗、タンク培養をつぶさに観察することができたのでこゝにその概況を報告する。

この技術習得班を組織するにあたり、戦後派といわれる岡山ノリ養殖業のバツクにあるもの、瀬戸内海漁業の特徴を見聞し、何でも見よう何でも聞いて帰えろうと話合つた。

このような次第で広く浅く見聞きしたため、連日強行軍になりいさゝかグロツキー気味であつたが、柏崎のり研究会の進展及び瀬戸内海のハマチ、タコ、ワカメ等の増殖計画の規模の大きさ、そこに生活する漁民のたくましい生産意欲には感歎させられた。

参加者は東町水産研究会の川添保氏、平野水産研究会の榎谷冊来氏、同じく坂口巖氏、喜入町漁協、瀬々串婦人部の川原ふくえ氏、出水漁協の市川慶一氏に筆者の6名である。

日程は9月24日に鹿兒島を發ち、岡山市、玉島市、児島市を訪ね、ノリやワカメの養殖状況を見聞し、更にハマチ、フグ養魚場、タコ養生施設等を見学し、9月29日に鹿兒島へ歸着した。

ノ、岡山県におけるノリ養殖業

イ、岡山県漁業の概況

全県の海岸線の長さは472 kmに及び海は一般に浅海性様相を呈し、干潟、藻場が広く散在し、干満の差が大きく(1.5~3 m)潮流の疎通がよいこと、瀬戸内海の中央部に位し、豊後水道と明石、鳴門海峡からの両潮流が相交錯する地点に当たっていること、吉井川、旭川、高梁川の三大河川を始め多くの河川がたえず有機質及び栄養塩類に富んだ陸水を注入しているので水産生物の繁殖生育に極めて好適な海域である。

その反面、瀬戸内海の中央部に当るため、外海への距離が遠く従つて沖合、遠洋漁業への発展を著しく妨げており、また浅海干潟が多く海上が平穏なため干拓に適しており、古来干拓が盛んに行われてきたが、最近は工場誘致のための埋立が行われ、本来狭い海面はますます狭められて行く傾向にあり、また、干拓、埋立は唯単に海面積を狭めるのみならず、それらの場所は貝類、藻類の養殖適地であり、また水産生物の産卵場や稚魚の生育場であるから水産生物の繁殖に大きな影響を与える外、工場廃水の水産生物に与える悪影響も多く、しばしば問題となつている。

海面漁業では以前は、たい罾網とかサワラ瀬びき網などのように比較的大規模の漁業があつたが、現在は殆ん

ど個人経営の零細なもので小型機船底びき網、ノリ、カキ、もがい養殖、イカナゴ、イカ、マナカツオ袋待網、ボラ等の建網（刺網）たこノ本釣などが主な漁業となっている。戦後何れの漁業も不振なまにかあつて浅海養殖のみが急速に伸びている。

ロ、ノリ養殖の歴史

戦後朝鮮からの引揚者によつて始められた。地種子がとれないため、広島、千葉県から種子付けしたものを購入していた。当初は女竹であつたが、種子付の良否、気候の急変等によつて豊凶がはなはだしく、昭和27年以前は県下総生産高は200万枚にすぎなかつた。

28年から水試で糸状体培養の研究を始め、29年には柏崎のり研究会（27名）が発足したが、2年位は見るべき成果もあがらなかつた。31年度から研究会活動も盛んになり、水試の指導で33年から人工採苗にも成功し、女竹から網藻に変わつて34年2,500万枚、35年は3,500万枚、36年5,500万枚と急速にのびてきた。

ハ、柏崎漁協の概況

柏崎漁協は玉島市玉島港（商港）の西側に位置し、内湾の狭い漁場をもつ小さな漁協である。のり養殖が始まるまでは、漁業権管理組合にすぎず漁業も見るべきものはなく、小型底曳5統、小型定置2、四手網及びノ本釣30という「おかず取り漁業」が行われていたにすぎない。一方、平均耕作反別4反6畝の狭い耕地しかなく、おまけに畑の方が田より多い畑作地帯であり、岡山県特有の果樹栽培（桃、ブドウ）が盛んであるが、ブドウを例にとれば、反当約300貫の生産で3万円（ノ貫当り100円）の手取りしかみこめない貧村に過ぎない。そのため正組合員311名、準組合員113名、計424名という人数をかゝえながら組合事務所もなく、年一回

の総会も数年開かれていないという状態にあつた。
くわしくは後述するが、のり研究会が29年発足以来独自の活動を続け、ことに32年糸状体培養、室内採苗に成功するや会員も80名にふくれ、どうしても漁協という立場でやらなくてはならなくなり組合員に呼びかけ、同年振りかの総会を開いた。このような状態であつたので会の進行年間計画等も研究会が準備したというお粗末なものにすぎなかつた。その結果、9名の理事中5名を研究会員が占めてしまい会長を組合長にまつりあげてしまつた。結果的にみれば、研究会が組合を包含してしまつたともいえるし、見方を変えれば研究会の正しい発展が新しい組合組織を作つたともいえる。

研究過程から経済行為へ、そして組合活動へと研究会活動の典型的な発展として考えさせられるものがあつた。

その後、若い組合長を中心にノリ養殖業を進める一方組合づくりが始まつたのであるが、今までのいきさつ上技術的なものは研究会で、共同施設資材購入、共同販売といった福利面を組合で担当している。昨年度の資材取扱い高は600万円で/家当り6〜7万円になつている。

新しい組合ができてから、まず第一にとりあげた問題は組合員の整理で、今まで名ばかりの組合員を淘汰して純粹の漁民だけとし、311名もあつた正組合員をけずり270名とした。また、今までルーズになつていた出資金（/口300円）をノリ代金から差引いて完納し、519,600円（1732口）にした。

のり養殖に関する組合の仕事としては、乾燥機の補助（ $\frac{1}{2}$ ）及び建設斡旋、ミス及び鏡の共同購入、製品の共販等の外共同水洗所を目下建設中である。この組合の地割は5×10間を/マスとして200円の行使料をとつている。

共販について述べると、入札を15日おきに年8回ほど行なっており、販神及び地元業者37名を指定している。昨年の実績では最高10.8円、最低0.80円、平均7.0～6.3円であつた。これは他組合よりも1.5～2.5円高値であるが、これは組合内部の自主検査の厳正さによるものと思う。検査の方法は各人別に選別し結束したもの(10枚を1帖にし、10帖1束にする)を部落別によりわけると、まず組合長が、1束の中から3枚任意に抜き出して悪いものを見つけたら、その部落全部ほどいてやりなおしている。(組合長の言をかりると「正直者が馬鹿を見るようなことはしたくない」とのこと)。次に販売員16名(各部落から2名宛選出している)が1束宛の枚数(100枚)をあたる。(1日に50万枚位処理している)別に検査員を3名きめてあり、当日の製品から表のような標準色を作り、コンペアで流れるものの中から自分の色にあつたものを取り出してよりわけると、漁期の始めは上物がでるが、次第に悪くなつていくが平均すればスイショウ1%、ムラサキ80%、その他20%にはなる。この外にキズモノ(やぶれ、あなあき)も同様に仕分けている。販売手数料は1分5厘である。

二、のり研究会の歴史

研究会が発足したのは昭和29年であり、当時会員は27名であつた。研究会発足の動機としては先述のように農業では食べるだけでなく、海に出ようにも経験がなかつたので朝鮮からの引揚者が中心になつて女竹と取組んだもので、2年間はほとんどみるべき活動はなく、広島から移入した女竹を建てたにすぎない。

31年に入り水試で人工採苗に成功以来急速に活動を始め、32年には研究会でも糸状体の培養を行い成功し

た。このころから会の組織も確立され、ノリ養殖をするなら研究会に入らなくてはならないような気運ができてきた。(先述の組合の弱体であつたことにもよると思うが……)その後ノリ価格の高騰などにより会員も急激に増え現在105人になつている。そしてノリ養殖については研究会が全ての権限を持つており、地割から種子付まで全てを行うよになつて、事務所を作りさらに新農山事業で倉庫も作つた。現在これは組合の事務所、倉庫として使用しているが、玄関にかゝつた組合の看板が研究会のそれよりも貧弱であつたのは、単に表面のみの活動で経済行為をやつていない鹿児島県の各研究会と比べ奇妙な感にうたれた。

会の組織は下表のよになつており、中でも

研究会 105名	{	技術部	22名	……	各部落1名と当初からの 会員14名
		販売部	16名	……	各部落2名
		検査員	3名		
		監視員(統制委員)			

技術部へ入るには資格審査をしているほど難かしい。即ち、技術部で糸状体培養の管理、観測諸調査、地割を行なつており、全て技術部の指導で管理が行なわれていることにもよる。技術部の権限の例をあげると女竹から網換に切替える時、どうしても聞き入れない人があつたので、夜これを引き抜きその後網換を張りこんだほどである。一時は本人がおこつたが、後になつて生産があがるよになつて非常に協力的になり、今では卒先してやつている。また、発足当時からの技術部員で養子の人があつたが、昔は会に出席するのにしつうとに對しどうも都合が悪いよりで、かくれるよにしたものだが、最近は会の仕事といえは大手を振つて出かけられるよになつて

なつた。というような話があり、信頼も権限も持った組織になつている。

会の予算面をみると、種子付収入が大部分を占めているが、網鱈/枚300円、かきがら/枚5円であり、網鱈約5,000枚、かきがら30万枚を販売しており、本年の予算額は300万に達している。益金は視察、研究の外は全て施設の拡充に使用している。

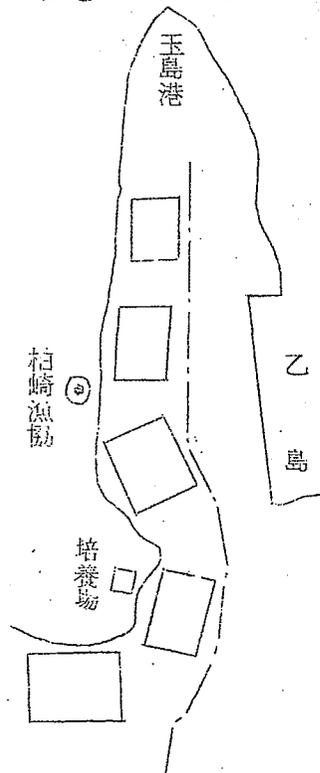
このような発展を「私たちは戦後派漁民であつたために、水試その他の指導を受入れ易かつたのではないだろうか」と組合長になつた研究会長は話していた。なお、蛇足かもしれぬが「吾々は60代から40代の組合長をたてることによつて飛躍的に進歩した。しかし、これからの沿岸漁業がのびるためにはもつと若いエネルギーと勇気とアイデア(考え)を必要とするようだ。私は30代の組合長を作るべきであると思う」と夜を徹して語つた彼の言葉は、この視察を通じて一番忘れえぬものであつた。

ホ、のり養殖の現況

1) 漁場

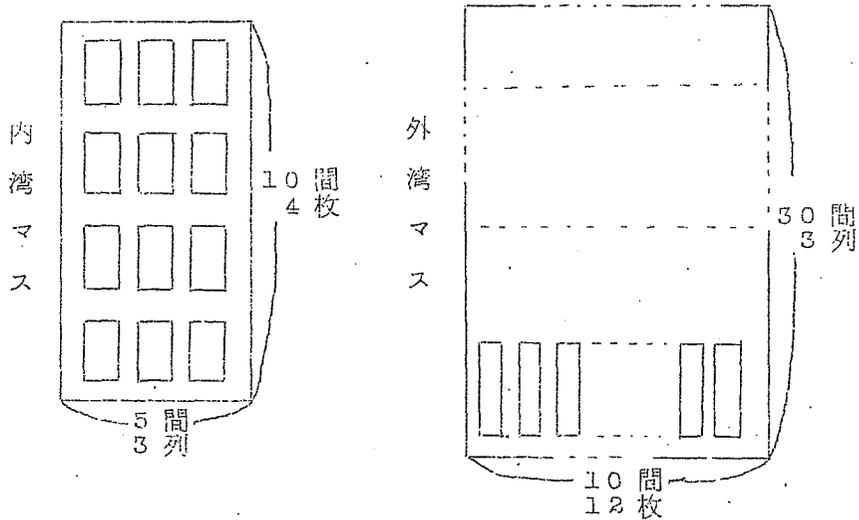
先述のように内海の内湾であるため、波浪少なく、しかも栄養分に富み、平均N量200~300 $\%$ 、P量60 $\%$ という好漁場であるが、内湾ゆえに潮の流通が悪い所ができ、そのため函のように5区割に漁場を大分している。

即ち、I、II、IIIは内湾と称し、Iマス5 \times 10間が270
IV、Vは外湾と称し10 \times 30



間が7尺になつている。この中に竹すだれ（内湾：外湾
 = 60 : 30）3,600枚（規格は後述）網簾（4尺×10
 間）2,400枚が張込みされる。

竹すだれの場合ノマスに図のように4×3枚に張られ
 るが、すだれ間は船が通れるように約6尺あけてある。



網簾の場合（10×30間）3×12枚を張っている。
 通常ひだのしめる割合を12%といわれているが、こゝ
 では20%になつている。これは業者の急増と沖合進出
 に対する技術的難点からやむを得ない処置であつたとの
 ことで、N量の危険量30%を下るような場合は後述の
 ような処置がとられている。

個人別の張込み枚数をみると、経験年数により違いが
 あるが多い人で5マス、少ない人は0.5マスをもつてい
 る。最大5マスとは農業で5畝（100万円）農業とい
 っているのに相当し、それを基準に100万円ノリを目
 標にしたとのことである。

最近業者が増える傾向にあるが、新規はこれ以上認めな
 い方針で一家から一人だけ分家を認め0.5マスを与える
 ことにしている。また生産増強のために賞をもうけてあ

り、ノマス当りの増加、品質の向上によつて来年のマスを0.5だけ増やしている。

2) 種子付け

現在研究会で管理している糸状体培養貝殻は35万個であるがこのうち5万個は普通病気、栄養不良、その他でだめになる。採苗方法についてはくわしくは後述するが、これで約8,000枚の網ひゞの室内採苗を行ない後は竹すだれ用を使用している。網ひゞ1枚の種子付け料は300円であり、カキガラ1個5円である。竹すだれに種子付は培養中にあいている穴を利用して、これを荷札用針金程度のもので使つて竹自体に直接まきつけている。ノすだれ(7尺×2間)の使用量は5~6個である。現在タカンボ、落下傘等種々の方法が研究されているが、一考を要すると思う。網ひゞの種子付け枚数が張込枚数の3倍強になつているのは、予備網の制度をとつているためである。

この予備網の制度とは、人工種子付けであつても出来、不出来があり、又養殖途中の種々の事故にあつたりすることを考慮し、さらに抑制(後述)のためである。即ち $\frac{1}{3}$ は種子付け良好なものを選び張込みする。 $\frac{1}{3}$ は抑制又は予備網として干出6~7時間に高張りしておき、 $\frac{1}{3}$ は種子付け不良のものとしてすぐにひきあげて来年の網として保存するようにしている。この外に組合としては700~1,000枚の予備網を準備し、不慮の災害にそなえている。この制度を採用してから、年度別の豊凶差が少なくなつている。

3) ひび

この地で使用するひゞは、竹すだれが大半を占めてい
るが、これは表のように生産率が高いことにもよるが漁場が内湾の栄養分に富むことにもよる。

竹すだれと網ひよとの生産状況

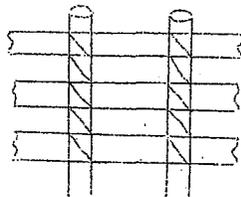
分 別	最低 ~ 最高	提出件数	平均値	モード
竹 す だ れ	A 100~1,200	43	440	410
	B 200~3,000	41	1,100	1,090
	C 100~2,700	43	1,460	1,480
	D 1,200~3,000	26	1,760	1,790
コ ー ル ヤ ン 網	A 200~3,500	35	1,580	1,740
	B 400~4,000	31	1,700	1,670
	C 300~3,000	37	1,560	1,160
	D 100~3,000	33	1,200	1,340
ク レ モ ナ 網	A 100~3,000	20	1,360	1,330
	B 400~2,400	11	1,370	1,130
	C 100~2,500	10	1,060	850
	D 300~1,800	8	960	1,060

註①これは研究会員からアンケート式に調査したものである。

②分別は、すだれ、コールヤン、クレモナとそれぞれ別の場所である。

③この表から感ずることは、クレモナ網の提出件数の少ないことからその経験年数が浅く、取扱い技術の不備によるものと考えられる。

竹すだれは2分5厘(8mm)厚さに割った猛宗竹をを2寸(6cm)おきに50本並べ、2間にし、これを図のように2.5尺の間隔に4寸竹でおさえ、2×のコールヤンでくさりつける。以前はこのコールヤンをワラなわを使用していたが、



④ワラより軽い⑤なわにもノリがつく⑥アオが少くないの理由でコールヤンに変わってきたものである。現地は竹の少ない所で4寸竹/束(1/2

〜/6本)で本年は280円もしたとのことである。

網ひとは大部分パームであり、化せんもクレモナ1号、5号、サランも入つてはいるが、先述のように生産量に差がないことから全体に普及することはむずかしい現状にある。即ちパームは350〜400円で1年しか使用できないが、後で農業用(トンネル栽培のビニールのおさえ)に100円で売却でき、化繊は900〜1,000円で3〜4年使用できるが、年間の消耗を考えるとパーム:化繊=200円:300円となつて化繊が経済効果のうすいことも注目にあたいする。

※ この報告書は3回に分けて掲載致します。

目に角たてる「タコ」

本文は「水産科学」1961・1

“水中漫步”より転載

陸上でサル仲間がわれわれ人類に大変親近感をもつて眺められる様に、タコ程人間にとって身近に感ずる水中の動物もない様に思うがなぜであろう。その仕草振舞いがわれわれに似てしかも闇が抜けているところが、人類の優越感をちよつびりくすぐるからかも知れない。大変に大食なタコは、索餌上あまり密集して棲息しないのが普通であるが最近陸上での住宅難を反映した訳でもあるまいが、人間の要求に従つて近頃では蜂の巣状あるいは小学校の下駄箱式生簀の“タコアパート”住いを余儀なくされ、手足の触れ合う程の手狭な生活に明け暮れる気の毒な身の上になり下つた。しかし広い海底を吾物顔に漫步していた頃の身ぎれいな性質は変更されることなく、このアパートの個室の小ぎれいさには感心のほかはない。何事

も始めのしつけがかんじんなことは他の動物し育と変りなく、この
地族、最初個々の巢穴に餌を入れてやる習慣をつけると一度に広場
に餌をやつても出てきて摂らうとしなくなるから可愛くない。餌の
取込みは象の鼻の様な腕を2本も3本も巢穴から出して巧妙にそし
て欲張つて体が持上る程一杯抱き込み考えられない程の早さで平ら
げてしまいまたその残物を遠慮なく他処に撒き散らして憚らぬ。
自分丈の住いは大切にするが公共の広場を汚して省りみないガリガ
リ根性は、一歩も社会的良風を身につけようとしなない不心得であり
何処かの大衆そつくりである。海底でもさきの巢穴の中とは反対に
その入口に食事の残物をうづ高く積み上げて平然としているので、
われわれ水中散歩者の絶好の目印になり、捕えられて、しまつたと
頭をかいても後の祭りである。頭隠して尻かくさずとはこれから出
た言葉だとおつしやる方もある位で、清掃夫さんのチリンチリンが
やつて来る迄は「タコ(テコ)でも動かぬ」心算らしい。世の女流
評論家にこつびどくやられるのは必定だが、タコに耳のないのが幸
いで行く行く「タコに念仏」なる新語も造られるかも知れない。
この耳なし頭にねじり鉢巻は漫画にでてくるタコ君の代表的な姿で
あるが、タコ君程世上に誤り伝えられかつ画がかかっている動物も
他にない。この頭は実は胴にあたる部分で眼のある小部分が真実の
頭に相当しこれに8本の腕がついていて彼等は常時逆立ちして歩い
ている訳でありまた口はひよつとこの様に突き出た水管ではなく8
本の腕の付根にあつて「上を向いて歩こう」という時流に逆らつて
常に下を向いて歩いている事になる。この反逆精神を以つてしても
骨のないのは如何ともし難く、前述のタコアパートが波でゆれ動く
と、タコのアタマもゆらゆらゆれて遂にはこの滑らかなアタマも一
皮むけて禿頭の上に更に卵の白味の様なハゲができる。美観を損ず
る事甚だしく市販に耐えない有様となつてしまうが、これも御興の
カツギ棒の様に長竿を両側に取付けて動揺止めとすると少々波でも
安定して成果を上げる。しかし禍を転じて福となす術を心得ない
訳ではなく、5ミリ位の隙間が20cm程の長さもあれば百匁位の大

きさでも抜け出す事ができこの術には猿飛佐助もちよつとまねが
きまいと思われる。これは丁度餅を延ばした様に変体するからであ
るが、やはり一本抜けたところもあり、2000目位の荒い金網では駄
目である。 8本の腕を同時にあちこちの穴からだしてしまうか
らで、こゝらがタコ君の知恵の限度というものであろう。骨のない
無脊椎動物中進化の最高にあるといわれる丈あつて彼等の神経発達
生理機構の複雑さは相当なものであり、皮膚にある4種の色素胞
(赤、黒、黄、虹色)を自在に調節し瞬時に変色して喜怒哀楽?を
表現する。この色素胞は煮ると破れて着色し真赤なユテダコが仕上
る仕組みである。 好物のカニを見ると興奮してパット黒ずみ、
とび掛つて抱き込むや直ちに後唾腺から分泌されるチラミン毒素で
マヒさせ甲を剥いで見る間にめしあがる仕草は壺に入つており、堅
牢な貝でもこの毒で易々と殻を開かせてしまうか腕力に物いわせて
バリバリ舐いて頂戴、2、3日分くらいは食いだめられる。西洋で
devil-fish (悪魔の魚)と敬遠される所以であろう。 この毒
は人間にとつてももちろん有毒であるが量が少ないので咬まれても
時に気分が悪くなる程度で煮れば全然無毒となる。 経済の方面
で「タコ配当」なる語がありタコの自食現象に準えたものであるが
これは決して食不足丈から起るものではなく環境の激変による神経
錯乱の結果とされている。例え自分の足を食つたタコでも環境がよ
くなれば結構卵を産むから便利なものである。ところで水から揚げ
られシタリ顔したタコ君もアタマをポンと叩かれると途端に目に角
立てて怒るからまことにこつけいである。頭からユゲこを立てない
が癖かに振り上げた二の手を止めさせる価値のある様相ではある。
その母性愛も人間なみで、産みつけた卵の孵える迄食事もろくろ
く摂らず約1カ月間も頑張つて保護するのは涙ぐまじき限りであり、
遂にはやせおとろえて絶命するに至つては哀れというもおろかであ
る。タコツボの中にいつたん卵を産んだらこれから離れず、この保
育中のタコがつばを抱えて引あげられてくる時は福売とはいいい年ら
つくづく漁師稼業がうらめしくなるとはある一漁夫のなげきであり、
これをせめてもの供養としてタコ君にささげる次第である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

※ 奄美大島の正月は内地より一足さきに訪れる。

内地の皆様には奇異に感ぜられるところですが、春とか、夏とか一般的に自然現象の訪れはたしかに内地より1、2ヶ月早いのが、地理的にみても我々の皮膚を感ぜしむるところですが、正月だけはピンとこない。先ず1/2月の28日に元旦の新聞が各家庭に投げこまれる。毎日新聞によれば、高橋圭三さんが美女の芸能人に囲まれ、皆さんオメデトウとくる。アレ!!この新聞は36年元旦のものかな、旧いものもあつたものだなあと一瞬トマドイ、日付けをみると37年元旦とたしかに誓いてある。ヘンにキツネにつままれた気持ちでいると、30日になつて年賀状がドサツと投げこまれる。「謹賀新年」「今年もどうぞよろしく」と、こちとやらはモチツキに忙がしいのにオメデトウとくるのだから頭にキチヤウ!! どうも新聞社も郵便局も気が早過ぎるよ。印刷されたものは来年のものであろうと、いつでも配達する。そしてほんとうの元旦には、ゆつくり酒でも飲みましようというところらしい。あれだけ郵政省の労組も、ヤイノヤイノと言つて無理を通せば、我々の感情がどうであれ無関心、とんだところでボロを出したものだ。と言つて真の元旦を迎え、やがて4日の仕事始めの日に1/2月30日3/日の新聞が配達になる。そして「今年をふり返つて」とか「来年はぜひ……したい」とか誓いてある。こんな経験ははじめてで、離島ならではというところでしょう。益々ボケてくる。

※ 今年の元旦の前後は時化ばかり、アラレが降り、雨が降り、そして冷たい風が吹く、オーバーなしでは戸外に出れない寒さであつた。こんなことは13年ぶりだつたとか、季節的変異?かくて人間様は家の中でじつくり飲み、ビューンと吹く冷たい風と雨の間

隙を縫つて、蛇味線の奏るメロデーも一段と哀調を帯びてくる。風光明媚な瀬戸内海峡も寒風のため一面に白波が立ち、その中に外国航路の船が3、4隻避難し、一見ロマンチックではあるが、わびしさを加えた元旦風景であつた。ただラジオだけがハデナ流行歌をウナツテいる、テレビでもあれば……

※ 正月前の魚の値段は史上最高であつた。

ムロアジ 100匁 150円、カツオ節が 100匁 400円、値上りムードもこゝまでくれば何をか言わんや。せつかく給与改訂でホツトしたのは東間、これら物価高には焼石に水、正月過ぎれば青息吐息、追給もシユンといつて蒸発してなくなつた。近代経済学も頭が痛いところだろう。需要供給のアンバランスが特にひどい離島での経済政策も、手のつけようがないのか、池田さんよシツカリタノンマツセ!!

Y、I 記

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 漁 業 部

※ 東支那海、海洋観測のため1月8日出港した照南丸は予定通り1月15日終了帰港。

※ 西海区水研資源部の照南丸用船による東支那海サバ標識放流は、西水研、庄島、小川両技官、当场、竹下、川上両技師が乗船し、1月25日鹿兒島出港、同海区出漁中の民間船数隻と連絡を密にしつゝ漁場を探索、極力放流に努めたが魚群稀薄、浮上しないため(魚釣島西方)2月9日までに1,211尾を放流し、その後北上しつゝ魚群探索するも魚群を見ぬまゝ2月16日鹿兒島へ帰港。

※ 1月19日西海区水研沿岸資源部長辻田技官来訪、東海サバ魚体調査（西水研委託）の要領指導、更に1月30日西水研井田、池元両氏来場同魚体調査を実施。

当場自体による魚体調査は12日、19日の両日東海サバを実施。

※ 試験船「かもめ」による鹿児島湾内フグ延縄試験を2月12、13、14、15日に涉り水深30～220mの間を実施するも成果を見るに到らなかった。

○ 養 殖 部

※ 2月5日

大島分場長 前田耕作氏、熊毛支庁 小松允男氏 米鹿
※ 豊田部長、東技補は長崎市における浅海増殖効果調査検討会
に出席。トコブシ、マクリの投石効果について発表、特にトコ
ブシについては北のアワビに対する重要資源として列席者の注
目をあびた。

※ 瀬戸口技師はトコブシ切片包埋、染色作業。

マハ、クロチヨウガイの実験データの整理、真珠加工等に多忙
を極めた。

又、2月10日海灣のワカメ生育状態を調査したが、ほとんど
展開できる見込みはなかった。

※ 新村技師は時節柄出水笠沙方面のノリ摘採、抄製、糸状体培
養指導と実験整理に大多忙であった。

○ 1月30日 ノリミス購入について（こしき島青瀬漁協）

2月 9日 イワノリ抄製について（全上 漁協長他）

○ 2月16日 ノリ被害について（出水市 漁協長他）

※ 東技補は1月24、25日漁場観測指導のため頼野町水成川
へ 1月31日アケガイ調査のため指宿市へ

○ 製 造 部

※ ハマチ（ブリ）くん製試験

牛根漁協養殖ハマチ（ブリ）のくん製試験を先月に引継ぎ実施中。

※ フィッシュケーキ製造試験

1月30～30日今次は特に調味液配合割合を主とし実施した。

※ 指導調査関係

○ 1月24日～27日 宮崎県沿岸漁業指導所におけるハマチくん製について打合せ調査。

○ 1月31日～2月3日

山川、枕崎のかつお節工場調査及び廃棄物利用状況調査。

○ 2月5日～9日

内之浦地区において水産加工技術講習指導。

○ 2月9日～14日

大阪府主催 全国たべもの展出席。

○ 2月13日～16日

顕姪町において水産加工技術講習指導。

※ 大島分場実島水技補 水産加工技術研修のため来場研修中。

○ 調査部

※ ハマチ蓄養関係

今月はいよいよ昭和37年度事業計画立案の段階となり、動きが大変あわただしい。

1月下旬に水産庁瀬戸内海漁業調整事務局主催の昭和37年かん水養魚用種苗需給対策協議会が神戸で開かれ、それに出席した島山部長は、帰途和歌山、岡山、山口の先進地を視察した。

一方、下旬に内之浦町ではブリ仔採捕蓄養についての説明会が、また、東町ハマチ蓄養適地調査が行なわれた。2月中旬には、種苗採捕蓄養根拠地候補として大泊、伊座敷を調査した。

2月26日に本場にて本年度県内ハマチ種苗需給対策打合せ会

を開く予定である。

※ 水質調査関係

澱粉工場廃水による肝付川汚濁調査（本年度4回目）の試料採取は1月22、23日に行なわれた。1月下旬に出水市荒崎ノリ養殖場を養殖部と共同調査、2月13日に山川町成川養鰻池建設予定地の水質調査をした。

※ 魚礁調査関係

2月上旬：鹿児島湾内ドラム缶魚礁調査。続いて枕崎、笠沙野間池の聴取り調査を実施した。

※ その他

2月10日：「昭和35年度鹿児島県水産試験場事業報告」を関係団体に配付。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 養 魚 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

※ 1月12日 場長加治木へ 伊佐地区連絡協議会

※ 1月13日 切藻への注水

※ 1月17日 親ゴイシ育池区画の猛宗竹伐採運搬

※ 1月18日 食用ゴイ取揚運搬。NHK、TV記者養魚場撮影。

大口市役所派遣職員坂本君警視庁勤務のため退職。

※ 1月24日～26日 堆肥切り返し作業。

※ 1月29日～31日 場長吹上町へ 養鯉指導。

※ 1月30日 池田、竹下鹿児島へ 事務連絡

※ 1月30日～31日 堆肥切り返し作業。

※ その他：来訪者

1月13日 八代市漁協員14名、14日 大口市長以下5名、

西田本場長、宮之城中村養魚場中村氏及北薩養鯉組合長以下5名、

19日 水産課上村技補佐。